

一片が發行された。以下「新羅文武王陵碑に就きて」「慶州栢栗寺六面石幢刻文」「鷲棲寺舍利石盒刻記」「聖徳大王神鏡之銘」等何れも巡狩碑考と同じく、金石文の釋讀である。その文献考古學的な考究法は蓋し著者特意の壇上であつた。「慶州所藏玉笛考」及び「新羅時代の土器に彫刻せる神話」は最初の慶州調査記と同時の所産、その考古辭はこの時分に胚胎してゐた。

最後に「鉄原の名勝孤石亭」及び「到彼岸寺佛像調査記」は昭和六年眞夏、私もその行を共にした折の江原道鉄原地方に於ける調査記である。本篇には皇紀を採用してゐるがそれは著者晩年の持論であつた。

以上本書内容の主なるものにつき一瞥した次第であるが、その統一を缺いて蕪雜の感を興へ、所論亦往々にして前後撞着するものもある、之は著者自身によつて意圖せられた著作でない事を顧慮されねばならないであらう。寧ろその大體に於て新羅史研究に於けるライタル・ポイントを把握して誤らなかつたことを認めてよからうと思ふ。新羅史研究の正しき進展と輝かしき業績とは、かゝる迷作を捨て石とする今後こそ期せられねばならぬ。

終りに編纂者によつて原文缺く所の補註を數多く加へられたことは結構であるが、本書を讀む程のものに取つては往々不必要である思或ひは煩に過ぎると思はれるものがないでもない。誤植の多いのも否み難いといふことを私は恐る／＼申し上げる。菊判五九五頁、圖版八葉、京城近澤書店發行、定價

五圓(今西春秋)

● 永和九年在銘塚出土古墳調査報告

——朝鮮總督府昭和七年庚古蹟調査報告第一册——

野守 健 榎本龜次郎著

昭和七年、平壤驛の構内にて發掘された古墳で、永和九年三月十日遼東韓玄菟太守修利造」と銘のある塚を使用してゐたので當初より諸學者の注意を惹いてゐたが、いまこの報告を得て詳細にその古墳の状態を知り得ることは甚だ幸である。それにはかく迅速に報告を公にされた兩氏の勞を深く多としなければならぬ。

この古墳は樂浪遺蹟に普通見る塚室墓に似ず、下半部を塚積み、上半部を石積みにし、しかもそれに漆喰を塗つてゐる。本棺は二個あつたらしく、鐵釘、鐵鏃、牛骨製の弓弭と覺しきもの、漆杯等の遺物を出土したが、特に興味を惹くものは三國時代の南鮮に普通見る耳飾の環を出土せることである。末期の變異せる塚室墓、しかも樂浪郡滅亡の年として知られてゐる西晉愍帝の建興元年(西紀三一三)を後れること四十年の年號銘を有つてゐる塚室墓から、南鮮風の耳飾を出土したことは、今年度の發掘に於いて樂浪の木槨墓から勾玉様のもの、出土したことと共に歴史的上の興味をそゝることが深い。記述も簡潔であり、記銘の解釋も穩當である。終には樂浪帶方郡地方の紀年塚室墓を附載する。文獻的研究にも參考になるところの多い報告書で

ある。(水野)

●東西交通史論叢

桑原 陸藏著

本書は故桑原博士の著作中、東西交渉に關係したる論文八篇を選び出版したものである。此等の諸篇は悉く諸雜誌に掲載して世に問うたものであり、今日も猶依然として價値の認められて居るものである故、改めて其の内容を喋々するまでもないが、此處に序を追うて、簡単な紹介を試みると、一、張騫の遠征は、其の名の示す如く、張騫の西域遠征に關する割時期的研究であつて、從來言及されて居ない點を明かにすると、多し、殊に河西地方に於ける月氏と烏孫の位置、月氏移動年代、大宛貴山城の所在地、匈奴種族名の起原、西域輸入の植物等に就き、卓越した解釋をほどこしたものである。二、大宛國の貴山城に就いて、は一に於て論斷した貴山城に就いて、更に詳細に述べたもので、從來の諸説を批判研討し、フェルガナ地方のコーシエントを比定するを最も妥當とする所以を力説したものである。此の結果、ガゼン説を持すに、白鳥、藤田兩博士の駁論が發表され、三、再び大宛國の貴山城に就いて、四、藤田君の「貴山城及び監氏城考」を讀む、はこれに對する應酬である。此の論譯は、新城、飯島兩博士の支那古代天文に關するそれと共に、當時、斯學者の話題を華やかならしめたるもので、今日も猶吾々の耳に新なるところであらう。以上は、主として漢代に於ける西域問題に就いて論ぜられたものであるが、第五以下は、唐

宋時代に於ける、東西海上交通に關する雄篇で、博士の不朽の名著たる蒲壽庚の事蹟と相補ふものである。即ち、五、藤田君の「宋代市舶司及び市舶條例」に就いて、は、宋代の市舶の名稱、提舉市舶使、同司等の職務などに關し藤田博士への駁論である。六、波斯灣の東洋貿易港に就いて、は主としてヒーラ、

ウホラ、パスラ、シーラーフ等に就きて述べ、支那の諸記録に見ゆる諸地名を比定し、特に、後漢書の子羅國をウホラに、新唐書の夏臘城をヒーラに、同書提維虛和國をツエルララハにあて、其の他諸書に散見する尸羅國、施那嶺、撒那威等の地名を致へ、或は又、新唐書地理志に記載されたインダス河口よりバクダツトに到る道筋等に就き一々優れた研究を試みたものである。七、カンフウ問題殊にその陥落年代に就いて、はアプツエイドの所傳に記載したるカンフウを杭州とする説を排したもので、唐宋黃巢が杭州を陥落せしめたる記事を疑問とし、更に廣州陥落年代は却つてムハメット教徒の所傳を確かと考へて、これによつて遂に支那の記録を批判するを是とし、かくて、カンフウ廣州説により強固なる根據を興へたものである。八、「インアン」コルダドベリの旅行記に見えたる支那貿易港殊にシアンフウとカンツウに就いて」はインアンコルダドベリに記載された支那の四貿易港に就いて説いたものであつて、殊に其の何處に該當するか、未だ定説のなかつた二港に就いて考證を試み、先づ、カンツウを以つて、永平、膠、萊江、杭州等に比定するの諸説の不可なる理由を明かにし、揚州説の最も可なるを確證し、